

報告番号	甲 ㊦ 第	号	氏 名	加 茂 徹 郎
主 論 文 題 名 Prognostic values of the Berlin definition criteria, blood lactate level, and fibroproliferative changes on high-resolution computed tomography in ARDS patients (ARDS患者におけるベルリン定義による重症度分類、血中乳酸値および高分解能CT上の線維増殖性変化を用いた予後予測に関する研究)				
(内 容 の 要 旨) 急性呼吸窮迫症候群 (Acute respiratory distress syndrome: ARDS) は、血管透過性亢進による肺外水分量の増加、及び換気容積の減少を特徴とする急性の炎症性肺障害である。2012年に提唱されたベルリン定義はARDSの重症度を酸素化によって三段階に分類した。しかし、単純な酸素化の指標で患者の重症度を分類することは不十分だとする報告もある。また高分解能CT (high-resolution CT: HRCT) の所見は病理学的な変化ともよく関連し、肺の線維化を示唆する浸潤影内部の気管支拡張像が死亡率や人工呼吸器装着日数と関連することが示されている。これまで、HRCT所見を含めた臨床的指標とベルリン定義での重症度、患者転帰との関連について検討した報告はない。 本研究では、ベルリン定義と予後および肺の線維増殖性変化に関するHRCTスコアを含む臨床諸指標との関連を検討した。対象は、2012年1月から2015年12月の間に慶應義塾大学病院集中治療室で治療を受けた153名 (女性45名、平均年齢67歳) とした。ベルリン定義による重症度は、軽症42名、中等症71名、重症40名であった。基礎疾患は肺炎56名、誤嚥43名であった。42名 (27.5%) が30日以内に死亡し、30日死亡率は軽症10%、中等症23%、重症55%と有意差を認めた ($P < 0.05$)。非生存者では、APACHE II、SOFA、およびSAPS IIスコアが生存者よりも高かった ($P < 0.001$)。多変量解析により、血中乳酸濃度の上昇 ($2.0\text{mmol} / \text{L}$ 以上) とHRCTスコアの上昇が、ARDS患者の人工呼吸器離脱失敗および30日死亡率と有意に関連していた。 これらの成績から、ベルリン定義の重症度分類が日本人ARDS患者の予後と臓器不全に関連することが示された。また血中乳酸値および肺の線維増殖性変化を反映するHRCTスコアが人工呼吸器からの離脱や30日間の死亡率と独立して関連し、敗血症のない患者を含むARDS患者の転帰を予測できる可能性があることも示唆された。				